ソビエットにおける製茶化学に関する文献の紹介

京都府立農業試験場茶業研究所

酒 戸 彌 二 郎

Chemical Research of Tea in U. S. S. R.

By Ya-jirō SAKATO

ソ同盟では、1870 年南コーカサス地方のチャイ・グルジャ地方（わが国の青森辺で平均気温 14°C, 雨量 2500 mm）に皇室茶園が散在しておつたが、1917 年革命が成功するや、政府は「茶をもつて酒に替える」政策をとり、国立銀行は長期にわたつて農民に、無利息で資金を貸与し、1925 年には、半官半民のチャイ・グルジャ茶業会社を設立し、一般茶業農家を集団組織化し、また全ソ同盟消費組合中央連合会を設立し、ここで製茶を収納し一手に荷造包装した上、各地の消費組合を通じ販売するという全く完備した、一大エステートのようになつたのである。そして、更にスタリンの「コーヒーのために米国と争う意志はない」と云う言葉に示されるごとく、相次ぐ五ヵ年計画によつて集団農場を拡張し、数々の国营農場を開設し、現在では約20万ヘクター（約8万町歩）、3億ポンド近い茶を生産している。この中70%が紅茶であり残りはグリ茶で、主としてウラル地方の住民が愛飲している。かつて、ソ連の一技師の手により日本の玉緑茶が大きく発展し、ソ連がかつての日本玉緑茶の良き市場であつたことを想い浮べる時、革命後約40年、現在漸く自給自足の態勢にまでこぎつけたこの国の努力には、驚くべきものがある。

なお製茶化学の面においてもかなりの研究が行われていることは、Chemical Abstracts 等により概略は知られていたが、遺憾ながら今日までその詳しい報告を見ることができなかつた。たまたま1955年11月9日、ソ同盟科学アカデミー・パッハ記念生化学研究所長、アー・イー・オパーリン教授が当研究所に來られ、同所、ポポフ教授、ボクチャーバ女史の報文20種を当所に寄贈された。その中雑誌自然に記載されたボクチャーバ女史の「茶の生化学について」の全訳と、他の報文の標題を記し、関係各位の御参考に供する次第である。なおこの全訳は、京都大学文学部講師、植野修司氏を煩わしたのであり、付記して感謝の意を表する。

文 献 標 題

(1) ボクチャーバ、ポポフ、シュベルト：一般植物の酸化還元過程におけるタンニン系物質の役割（1951）（4頁）。

(2) ボクチャーバ：ポリフェノール酸化酵素及びカタラーゼの存在時のパーオキシダーゼの研究方法について（1948）（4頁）。

(3) ボクチャーバ、ポポフ：高温下でタンニン系物質とアミノ酸との相互作用による茶の芳香発現について（1954）（3頁）。

(4) ゴーギヤ：茶葉中のペクチンについて（13頁）。

(5) オパーリン、シュベルト：茶葉の酸化、呼吸システムについて（8頁）。

(6) ボクチャーバ：ポリフェノールオキシダーゼとパーオキシダーゼとの存在下におけるタンニン系物質の変化（9頁）。

(7) ボクチャーバ、シュベルト：茶の酸化酵素研究の基礎原理（9頁）。

(8) ボクチャーバ、ポポフ、ペトロバ：緑茶の生産におけるタンニン系物質の変化（7頁）。

(9) ジェムハージェ、シャリネバ：茶葉カテキンのペーパークロマトグラフについて（1955）（3頁）。

(10) ポフ：茶の醗酵に際しての二次的酸化過程（10頁）。

(11) ボクチャーバ、シュベルト、ポポフ：茶葉酸化酵素について（8頁）。

(12) ボクチャーバ：茶葉タンニンの意義と性質（11頁）。

(13) ジェムハージェ：タンニン系物質と茶の品質について（13頁）。

(14) ボクチャーバ：茶製造中、茶葉生育中におけるタンニン系物質の変化について（9頁）。

(15) ボクチャーバ：各種茶葉タンニンの酵素酸化について（8頁）。

(16) ボクチャーバ、ポポフ：不溶性茶葉タンニンについて（9頁）。

(17) ボクチャーバ：茶葉タンニンの変化におけるポリフェノールオキシダーゼとパーオキシダーゼの役割。

これらはすべて、ソ同盟科学アカデミー報告中、1948～1954年にわたつて生化学部門に報告されたもので、翻訳の終つたものから順次本誌上に掲載される予定である。（Feb. 14, 1956）